

明治維新時のピジン横浜方言

—母音音声転写分析—

大 川 英 明

Hideaki OKAWA. Pidgin Yokohama Dialect in the Early Meiji Period: Analyses of Phonetic Transcriptions of Vowels. *Studies in International Relations* Vol.38, No.1. October 2017. pp.1-8.

This research is an endeavor to analyze phonetic transcriptions and the mechanisms related to changes of vowels. This investigation is based on data available in the *Revised and Enlarged Edition of Exercises in the Yokohama Dialect*, which is a booklet written by Hoffman Atkinson in 1879. The booklet was published with a list of vocabulary and scores of sentences, with the intention of making it available to alien Yokohama residents in the last days of the Tokugawa shogunate, as learning material for communication with local Japanese citizens. The transcription is rather practical, for ease of learning for English-speaking Westerners, without recourse to *romaji* transcription which was not established at the time of publication. This research will propose: 1) ways to describe vowel changes in the cardinal vowel diagram, 2) that there is a strong tendency for three kinds of vowel changes, i.e, upward, forward, and bidirectional, and 3) that the distance between vowels is minimal.

1. はじめに

現在では大学や民間の日本語学校などの日本語教育機関も多く、大学では日本語教育関連科目が開講され、副専攻や主専攻として日本語教育プログラムを持つ大学も少なくない。さらに、民間でも日本語教員養成プログラムを開設している機関で資格を目指す人も多い^{註1}。また、今ではさまざまな教科書や教材が作成され、利用することができる。ところが、50年ほど前の1970年代では日本語教育機関や教員養成機関はまだ少なく、教科書や教材も限られていた。当然のことながら、更にそこから100年遡った明治維新の時代には、ヨーロッパを中心に歴史言語学、比較言語学の歴史があり、文法訳読法などの言語習得の研究はあったものの、外国語教育としての日本語教育に関しては教科書も教授法の知識もほぼ存在していなかった。

江戸時代の日本は鎖国政策を取っていたが、1854年の日米和親条約を一つの契機とし、1858年の日米修好通商条約を含む欧米5カ国との修好条約締結により東京と大阪が開市となり、さらには函館、神奈川、長崎、兵庫、新潟の5港が開港され、同

時に外国人の居住が可能となり、貿易が認められた。明治政府の成立が1868年であるので、明治維新の10年ほど前からすでに欧米人が日本に居住し始めたことになる。

貿易やキリスト教の布教を中心に様々な目的で欧米人が来日し始めた^{註2}が、そのなかにヘボン式ローマ字の考案者として知られているジェームズ・カーティス・ヘボン（James Curtis Hepburn）がいた。ヘボンは1867年（慶応3年）に『和英語林集成』という和英辞典を著した。そこでは英語に基づいたローマ字を使用していたが、これが最終的にヘボン式ローマ字となった。ヘボンは言語学者でなかったが、大学では医学を修め、米国長老派教会の医療伝道教師として幕末に来日し、聖書の日本語訳にも携わったことから、言語的な興味をもち、さらに、大学での高等教育の知識を基にローマ字による日本語表記法を打ち立てることができた。

ヘボンと同時期に横浜に滞在し、居住外国人が日本人とのコミュニケーションをする際の参考になるように、日本語を基に語彙や文例を小冊子にまとめたのがホフマン・アトキンソン（Atkinson,

Hoffman) である。アトキンソンは1879年(明治12年)に *Exercises in the Yokohama Dialect*^{註3} を出版した。ヘボン は規則的な一貫性を持つ表記法を用いて辞書編纂、日本語表記を行ったが、一方、アトキンソンは学問的なアプローチではなく、あくまでも実用に供するという目的でこの小冊子を編纂した。その大部分は日本語の語彙や表現を元にしてはいるものの、一部英語やその他の言語由来の表現が入っており、句や節や文にかかわる日本語の規則や活用形が正確でなく、むしろ簡略化されている部分が多い。つまり、コミュニケーションのために、特に英語話者に分かりやすいようにピジン化した日本語になっているといった特徴づけが可能である。

このアトキンソンの著書に関しては多くの論文、研究がある。多くは、表現構造の単純化、音声転写における英語的表記、特定の基本的な語彙の意味拡張、等に関して紹介的な分析が多いように思われる。*Exercises in the Yokohama Dialect* は全31ページであるので、紹介されている語彙数は限られ、また語彙や文例は体系的に選択、分析、配列されてはいない。アトキンソンのこの小冊子は言語学的、言語教育学的な研究対象になり得るが、本稿においては特に母音に関する音声学的な現象や音声転写に関する現象を扱い、今まで分析されていない変換現象や傾向を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

ホフマン・アトキンソンが *Exercises in the Yokohama Dialect* において日本語の表現をどのように表記しているかについて多くの研究で扱われている。日本語の語彙と音声転写された表記とを並べ、紹介するに止まるものがある一方、音声学的分析を行い、その変化を分析、記述したものもある。

並列の例では1) 英語訳と2) 日本語表現を英語を元にしたローマ字表記と3) 目標とした日本語表記を並べている。

- (1) a. you - oh my (お前)
- b. colour - eel oh (色)
- c. bad - worry (悪い)

d. difficult - moods cashey (難しい)

e. long - nang eye (長い)^{註4}

このような並列の例とともに、杉本(2010)のように、音声学的な分析による分類を試みた研究もある。杉本は「日本語の発音に似た英単語・音節を組み合わせたもの」という1節を設け、その中で次のような説明をしている。

- (2) Post-vocalic/r/ や語尾・子音直後の母音脱落など当時の欧米人の母語を反映した日本語の発音の特徴が随所に見られ、子音と母音で構成される個々の音節の一部の発音を必要以上に強調したり、伸ばしたり(短母音の長母音化や母音・子音の変質化(代用), 等), 日本語の子音と類似した英語の子音で代用する^{註5}。

(2)の具体例として次のような例を列記している。

- (3) a. mar key (<まき「薪」= firewood)
- b. die job (<だいじょうぶ「大丈夫」= unmistakably, without fail)
- c. moose me (<むすめ「娘」= a woman)^{註6}

さらに杉本(2010)では音節の脱落現象についても指摘し、(5)のような例を提示している。

- (4) 欧米人の耳に聞こえた日本語の中で、強勢のない音節が弱化して聞こえ、脱落したり、日本語の発音に類似した英語の単語を選択する場合に生じた不正確さなどに起因するものが多い。
- (5) a. mar (<まー「うま」= horse)
- b. coachy weedy (<こちういでい「こっちへおいで」= Come here)
- c. ah me kass (<あめがす「雨傘」= umbrella)^{註7}

Avram(2014)も1節を設け、音声・音韻分析を行っている。いくつかの音声規則を用い、音声転写の例を説明している。例えば、ローマ字表記では脱落する例を指摘している^{註8}。

- (6) 狭母音(/i/と/u/)が無声化する環境にある場合の脱落
arimas 'to have' <J arimasu 'to be'
- (7) [ç] から [ʃ] への交替
shto 'man' <J hito 'person'
- (8) [ŋ] の語中挿入
koongee 'nail' <J kugi 'nail'

ここまで紹介した研究は全体を分析して包括的に記述しているのではなく、比較的気づきやすい現

象をいくつか取り上げ、紹介していると言ってよいであろう。最も多くの変換規則を提示したのはKaiser (2010) である。その規則をまとめると、次のようになる。

(9) Kaiser (2010) の分析^{注9}

	変換規則	例
a	単音→長音	coots (靴), eemo (芋), obee (帯), oh char (お茶), ooshee (牛)
b	C+/ui/→C+/i:/	atsie (暑い), sammy (寒い), worry (悪い)
c	V+/tsu/→V:+/ts/	bates (別), tates (鉄), yotes (四つ), it suits (五つ)
d	有声音→無声音	cassie (風)
e	促音→直音(長音)	coach (こっち), meats (三つ), moots (六つ), yachts (八つ), yotes (四つ)
f	撥音→直音	donnysan (旦那さん)
g	拗音→非拗音	high yackoo (百)
h	/r/→/l/	dalley (誰), eel oh (色)
i	/fu/→/s/	stats (二つ)
j	/sh/→/s/	sto (人), stoats (一つ)
k	/shi/→/si/	sinjoe (進上), sitchi (七)

このようにKaiser (2010) は多くの規則を提案しているが、(9)の表を見ると、具体的な音の変化と音韻的な変化の二種があることがわかる。Kaiser (2010) は体系的にまとめようとしたところに貢献がある。

先行研究では上記のような音声変化がある程度わかるようになったが、具体的に関与する母音と子音の単音がどのような変化をしているかを分析した研究はないようである。あまり基礎的な側面の研究がされてこなかったように思われる。そこで、本稿ではこの問題を扱うが、特に母音に焦点を当て、そこでどのような変化が起きているかを明らかにする。

3. 母音変化の型

母音に関連してAvram (2014) は狭母音の脱落現象を指摘し、また、Kaiser (2010) は母音を含めた長音化 (9a) や母音変化 (9b) を挙げている。しかしながら、管見ではAtkinson (1879) における日本語表現の音転写を本格的に音声学的に、

または音韻論的に分析した研究はない。そこで、手始めとして、本稿では母音の音声転写に関わる現象を体系的に分析し、そこから得られる変換規則に関連する特徴を指摘する。

分析の手法を説明する。Atkinson (1879) では語彙のリストと表現文が含まれるが、まず、これらの語彙表現を全て取り上げ、そこに見られる音声変化を分析する。本節では母音の変化に関連する現象の分析を行う。例えば、紹介されている語彙の一つにmoods casheyがある。これは日本語の「難しい」であり、その意味はdifficultとして紹介されている。moods casheyの音声表記は[mu:dz kæʃi]であるが、日本語の発音は[muɔdzukaʃi:]^{注10}である。当然のことながら、この音声転記には日本語音からの変化が含まれることになる。日本語の最初の母音[u]は音声転写では[u]となり、しかも長母音化している。二つ目の母音[u]は母音の無声化が起こる環境ではないが、脱落している。三つ目の母音[a]は[æ]となり、最後の母音は日本語の[i]の長母音とは異なる。

日本語母音の種類は[i], [e], [a], [o], [u]の5種類あるが、日本語母音を英語を元に音声転写する場合、結論的に述べると、次に示すいくつかの型が考えられる。例はすべてAtkinson (1879) のものである。

- (10) a. 他の母音への交替 例：[e] → [i]
(酒 [sake] → sacky[sæki] (wine))
- b. 二重母音化^{注11} 例：[e] → [ei]
(別 [betsu] → bates[beits] (other))
- c. 長母音の短母音化 例：[i:] → [i]
(わりい [wari:]^{注12} → worry[wʌri] (bad))
- d. 短母音の長母音化 例：[a] → [a:]
(馬 [uma] → mar[ma:] (horse))
- e. 母音脱落 例：[u] → \emptyset ^{注13}
(水 [midzu] → meeds[mi:dz] (water))
- f. 拗音の直音化 例：[kʲ]^{注14} → [ki]
(東京 [to:k'o:] → Tokio[toukiou])

(10a)-(10e) は直接母音に変化が生じる現象である。(10f) は元となる日本語には母音が見られないところに[i]という母音が出現する例である。[kʲ]は硬口蓋化した軟口蓋無声子音である。しかしながら、音声転写をしたあとの形式に[i]という

母音が出現するので、母音が関与する現象ということで、ここに含めたが、本稿の母音間の変化という分析対象から外れるので、以下で展開される議論の対象とはならない。

(10)において可能な型の種類を提案したが、次にそれぞれの型における具体例にはどのような母音に関わるかを見るために、データを分析し、分類してみた。その結果は以下のとおりである。例は紙幅の関係により各型少数に限ることとする。

なお、外来語を日本語化した例は本来の日本語の音とは異なる特徴を示す可能性があるので、除くことにする。Atkinson (1879) の記述のなかで関連する母音の変化を集め、分類を試みたのが次の表である。変化の種類を基に具体例を示した。母音数の変化における数字は母音数を表す。「1→1」は短母音が短母音になっていることを表す。

(11) 母音に関連する変化の種類と例

変化の型	母音数	例
音 質 変 化		
[i] → [ə]	1 → 1	caberra <u>mono</u> (hat/被り物)
[e] → [i]	1 → 1	high kin (to see/拜見) sindoe (boatman/船頭)
[e] → [i:]	1 → 1	ah <u>me</u> (rain/雨) kireen (clean/きれい)
[a] → [ɛə]	1 → 2	sarah (plate/皿)
[au] → [ou]	2 → 2	a <u>row</u> (to wash/洗う)
[a] → [ə]	1 → 1	tomango (eggs/玉子)
[a] → [ər]	1 → 1	oh <u>terror</u> (church/おてら) tad sooner (reins/手綱)
[a] → [ou]	1 → 2	fooratchi-no-yats (loafter/不埒なやつ) sigh oh narrow (Good bye/さようなら)
[a] → [ɔ]	1 → 1	tongs (cabinet/箆筥)
[a] → [ɔ:]	1 → 1	walk-arimasen (not to understand/わかりません) bashaw (carrage/馬車)
[a] → [o]	1 → 1	kommysan (the lady/かみさん)
[a] → [æ]	1 → 1	nanny (what/なに) cad gee (conflagration/火事)
[o] → [a]	1 → 1	pom pom (* / ポンポン) ^{注15}
[o] → [uə]	1 → 2	your a shee (good/よろしい)
[o:] → [u]	1 → 1	berrobo-yaru (a “bad hat”/らぼうやろう)
[u] → [e]	1 → 1	caberra mono (hat/かぶりもの)
[u] → [ər]	1 → 1	nin soaker (coolier/人足)
[u] → [o]	1 → 1	kooromar (carriage/車)

[u] → [o:]	1 → 1	dyke <u>oh</u> (carpenter/大工)
短 母 音 化		
[i:] → [i]		oh kashy (ridiculous or laughable/おかしい)
[o:] → [o]		die job (unmistakably, without fail, etc./大丈夫)
長 母 音 化		
[i] → [i:]		eemo (potato/芋) she <u>buyer</u> (theatre/芝居屋)
[a] → [a:]		ah <u>kye</u> (red/赤い) ah booneye (take care/危ない)
[a] → [a:r]		mar <u>key</u> (firewood/薪) bakar (a slow servant/馬鹿)
[o] → [o:]		oh <u>my</u> (you/お前) eel <u>oh</u> (colour/色)
[u] → [u:]		ooshie (cattle/牛) oh <u>you</u> (hot water/お湯)
二 重 母 音 化		
[e] → [ei]	1 → 2	neigh dan (price/値段) bates (other/別)
[a] → [ai]	1 → 2	Kinsatz yah dai oh Dora your a shee. (* / 金札やだようドルよろしい。) ^{注16}
[ai] → [ai]	2 → 2	nigh (no/ない) dye (table/台)
[ae] → [ai]	2 → 2	oh <u>my</u> (you/お前)
[au] → [au]	2 → 2	cow (to buy/買う)
[o] → [ou]	1 → 2	akindoe (merchant/商人) coachy (here/こっち)
[oi] → [oi]	2 → 2	kooroy (black/黒い) motty <u>koy</u> (Bring/もってこい)
[o:] → [ou]	1 → 2	sinjoe (* / 進上) bosan (priest/坊さん)
母 音 脱 落		
[i]		hanash ϕ (to speak, to say, to tell/話) s ϕ tart here (tailor/仕立て屋)
[a]		ah me kass ϕ (umbrella/あめかさ(雨傘))
[o]		onadge gote (the same/同じこと)
[o:]		Tent ϕ sam kass (umbrella (sun)/天道様傘)
[u]		s ϕ koshe (little/少し) tack ϕ san (much/たくさん)
拗 音 の 直 音 化		
[ça] → [haij(ɛ)]		high yackoo (one hundred/百)
[kʰ] → [ki]		Tokio (* / 東京)
[mʰ] → [mi]		meonitchi (tomorrow/明日)
[rʰ] → [ri]		ichi rio (one dollar/一両)

上の表中の「拗音の直音化」は以下の分析方法とは直接関係がないが、英語話者にとっては発音が難しい音で、日本語学習歴がない場合や日本語学習の初級者の間では現在でもよく直音化される。拗音は硬口蓋化した子音であるが、英語話者にとり、その硬口蓋性を単子音に付与することが難しいので、舌面の硬口蓋へのせり上がりという硬口蓋化の特性に最も近い [i] という母音を単音として使っていると思われる。なお、当該例における後続の母音は5種類全て可能ではあるが、Atkinson (1879) は表中の事例は4例のみであった。

拗音と同様に母音が一部含まれるが、変則的な例が多少あったので、3件ほど簡単に紹介しておく。いずれも、以下の分析には含まれない。一つは日本語の連母音の [oi] が音声転写において [wi] に交替する例である。「こっちおいで」が *coach weedy* (Come here.) となっている。連母音の [o] が [w] になっているが、Atkinson (1879) では他例はない。

二つ目は半母音の [j] が [i] に交替する例である。「やだよ」が *yah dai oh* と表記されており、[jo] が [io] の組み合わせになっている。これは拗音の直音化と非常に類似しているが、これも1例のみである。

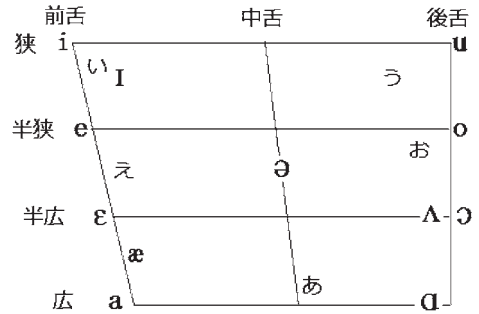
三つ目は /o/#o/ のように語境界が入る場合の音変化である。例として「戸を閉めろ」と「戸をあけます」の2例がある。「戸を」[to:] の部分が *toe* [tou] になっている。統語論の知識が関係してくるが、音の変化としては(11)中の二重母音化の例である [o:] → [ou] と同じである。

4. 母音変化の分析

4.1 短母音の変化の分析 (1→1の変化)

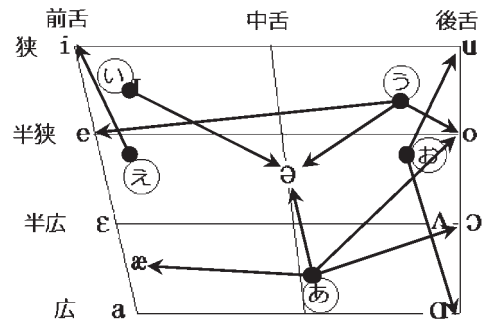
短母音が他の短母音に変化する場合 (1→1の変化)、5母音にどのような変化が起きているかを調べてみる。なお、変化の結果、母音の後ろに [r] が挿入される場合と、母音変化に長音化を伴う場合もここでの分析に含める。以下、次のような基本母音図を用い、母音の変化を投射していくことにする。

(12) 基本母音図



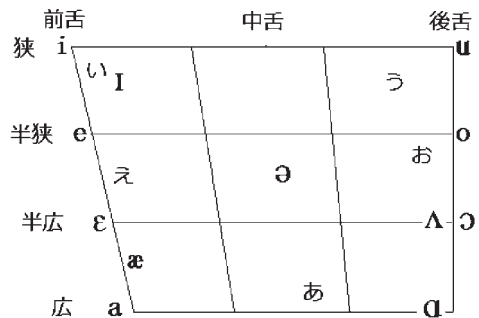
変化の元になる母音の横に矢印の●側を置き、変化後の母音の横に矢側を置くことにする。(11)中の「1→1」のデータを(12)の母音図に投射すると、(13)が得られる。

(13) 短母音の変化の分析 (1→1の変化)



まず、日本語の5母音を垂直方向 (開口度) と水平方向 (舌の最高点の前後の位置) で3グループに分ける。つまり、垂直方向で狭母音、中母音 (半狭母音と半広母音)、広母音の3群に分け、そして水平方向では前舌母音、中舌母音、後舌母音の3群に分ける。その結果、(14)のように3×3で9枠できることになる。

(14) 9等分割母音図



これを利用し、母音の移動距離を見ると、[u] → [e] の変化以外は全て枠一つ分の移動となっている。つまり、母音の変化は遠距離にはならない傾向があるということが言える。

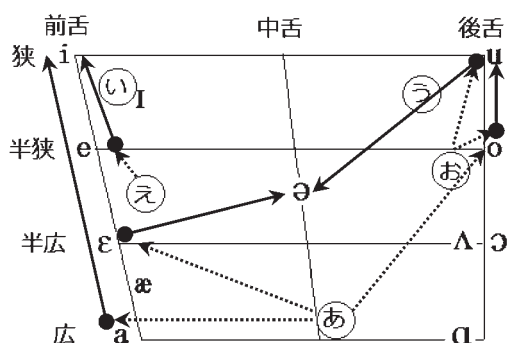
個別的に母音の変化の方向性を見ると, [a] と [u] はそれぞれの水平位置から前舌と後舌の2方向に移動し, また, 両者は中母音の [ə] に収束している。つまり, [a] と [u] は他の母音と比べ, 移動方向の可能性が多いと言える。

日本語における [o] に関しては水平方向の移動ではなく^{注17}, 垂直方向で移動している。つまり, 後舌という特性を保持しつつも, 開口度の点での変化を受け, 狭母音の [u] や広母音の [a] になっていることがわかる。

4.2 短母音の二重母音化の分析 (1→2の変化)

次に短母音の二重母音化現象を分析するが, その手法は前節と同様, (11)のデータのうち, 「1→2」の例の移動の方向を(12)の母音図に投射する。前節では一つの母音が別の一つの母音に変化する現象を扱ったが, ここでは一つの母音がそれとは異なる二重母音に変化するので, 新たな表記法を提案する。二重母音の表し方は前節と同様の表記法を採用するが, 元の母音と二重母音中の1番目の母音を点線で結ぶことにする。例えば, [e] → [ei] の場合, 二重母音の部分は [e] → [i] の変化であるので, [e] の横に矢印の●側を置き, [i] の近くに矢印側を置く。そして「え」と [e] の間を点線で結ぶ。このような方法で当該母音を母音図に示すと, 次のようになる。

(15) 短母音の二重母音化の分析 (1→2の変化)



このような表記法を採用し, 母音変化を母音図に投射すると, 変化の傾向がわかりやすくなる。(15)を見て, まず気がつくことは [o] → [uo] を除くと, 他は上向きであるということである。「上向き」には二つの種類がある。一つは元となる日本語母音と二重母音のうちの最初の母音が同等の高さか,

または, 元の母音よりも上ということである。もう一つは二重母音内の変化の方向が上向きということである。つまり, 短母音の二重母音化では開口度で見ると, 広→狭への変化が非常に優勢であるということがわかる。

もう一つ強い傾向は元の母音と二重母音の最初の音を比較すると, 全て前舌側か後舌側への移動であるということである。つまり, 両端への移動が認められる。

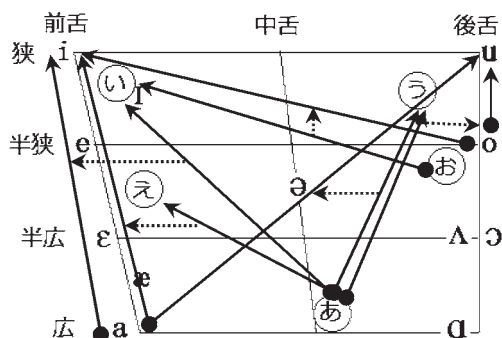
短母音の二重母音化の分析結果を(14)に照らしてみると, 元となる日本語母音と二重母音中の最初の母音は, [a] は多少の距離はあるものの, ほぼ隣りの区分に入っている。つまり, あまり離れてはいない。また, 二重母音の最初の母音と2つ目の母音も, [ai] 以外は近距離の移動であることがわかる。

4.3 連母音の二重母音化の分析 (2→2の変化)

最後に日本語の連母音が二重母音化する例を扱う。(11)のデータのうち「2→2」の例を取り上げ, 分析を試みることになるが, 前節と異なる新たな状況に対処するために, 新たな投射方法を提案し, それに基づき, 母音図に投射する。

この範疇に見られる変化の型も数がさほど多くはないが, 母音数が多くなる連母音と二重母音が関わってくるので, 投射の仕方が複雑になる。連母音と二重母音はそれぞれ前節での投射法を用いるが, これらの間の関係性を示すために点線の矢印で結ぶことにする。点線矢印の開始側が元になる連母音を表し, 矢印の終点側が二重母音を表す。そこで, (11)における「2→2」の例を母音基本図に投射してみると, (16)のようになる。

(16) 連母音の二重母音化の分析 (2→2の変化)



この図から連母音の二重母音化に内在する一般的な傾向が浮かび上がってくる。まず、連母音も二重母音も上向きということである。つまり、開口度が大きい音から小さい音への変化を表す。理論的には狭母音から広母音という移動は可能であるが、実際には逆の移動の方が圧倒的に多い。

二つ目は連母音の [auw] → [au] と [auw] → [ou] 以外は前舌側への移動（左向き）の移動になる傾向が優性であることがわかる。

5. 結語

以上、Atkinson（1879）に含まれる語彙のうち母音の音声転写における母音の変化を1→1（短母音の変化）、1→2（短母音から二重母音の変化）、2→2（連母音から二重母音の変化）の3グループで観察した。また、分析の方法としてこれらに見られる母音の変化を母音基本図に投射する方法を提案した。その結果、母音の変化を視覚的に把握することが可能になった。これに基づく考察から、舌の位置に関連する成果として次のような具体的な傾向があることを証明した。

(17) 分析結果：舌の位置に関する結果

分析群	舌の位置に関する結果
短母音の変化の分析 (1→1の変化)	1) 当該母音間の垂直、水平方向の発音の位置を比較すると、近い傾向が強い。 2) [a] と [u] は他の母音と比べて移動方向の数が多く、また、遠距離である。 3) [o] は垂直方向へ移動する。
短母音の二重母音化の分析 (1→2の変化)	1) 元の日本語母音と音声転写される二重母音の最初の母音では後者のほうが上（狭母音方向）になる。 2) 二重母音中の二つの母音を比較すると、1番目の開口度が2番目の母音の開口度よりも大きい。 3) 二重母音中の2つの母音を比較すると、2つ目の母音は水平方向の移動が中心で、しかも前向きの移動（前舌）か後ろ向きの移動（後舌）である。
連母音の二重母音化の分析 (2→2の変化)	1) 日本語の連母音も音声転写における二重母音もそれぞれ1番目の母音の開口度が2番目の母音よりも大きい。 2) 連母音の [auw] の二重母音化以外は1番目の母音よりも2番目の母音のほうが前舌に近くなる。

また、関与する当該母音間の母音図上の距離に関しては次のような結果を導くことができた。

(18) 分析結果：当該母音間の距離

分析群	当該母音間の距離
短母音の変化の分析 (1→1の変化)	当該母音間の垂直、水平方向で比較すると、比較的近い場合が多い。
短母音の二重母音化の分析 (1→2の変化)	
連母音の二重母音化の分析 (2→2の変化)	連母音の2点間の長さと同二重母音の2点間の長さを比較すると、二重母音の長さの方が連母音の長さよりも大きい。

以上、本稿では母音に関連する現象を扱い、母音変化の表記法を開発し、その適用により、母音変化に見られる特性を明らかにした。ここからの発展として、子音に関連する分析を行うことにより、母音と子音を含めたより巨視的な分析が期待できるであろう。

謝辞

匿名の審査員に原稿を読んでいただき、改善点を指摘していただきました。丁寧に読んでいただき、感謝いたします。

注

1. 木村（1997）によると1970年以前から1992年までの日本語教育機関開始時期と機関数は次の通りである。1970年代までは多くはなかったが、1980年代に入ると日本語教育機関が増加し始め、徐々に教材も増加していった。

日本語教育機関開始時期と機関数

70年以前に開始	18校
71－75年	7校
76－80年	11校
81－85年	55校
86－90年	260校
91－92年	77校

計428校

2. 杉本（2010: p.357）によると「商取引をしようとする人々をはじめとして、船舶所有者、

- 古物商人，競売関係者，競馬用の厩舎の所有者，宣教師など，様々な外国人が横浜で活躍していた」。
3. 現在入手可能なのは改訂版の *Revised and Enlarged Edition of Exercises in the Yokohama Dialect* である。以降の分析や議論はこの版に基づく。
 4. 例語(1a)-(1e)の記述は小玉(1999)から掲載。
 5. 杉本(2010: p.369)
 6. (3a)-(3c)の括弧内の記述は杉本(2010: p.370)から掲載。
 7. (5a)-(5c)の括弧内の記述は杉本(2010: p.376)から掲載。
 8. (6)-(8)の音声規則はAvram(2014: p.71)から掲載。これら3件以外に語中音添加と語尾音添加の例も指摘しているが，語例はAtkins(1879)からではないので，ここでは加えていない。
 9. Kaiser(2010)ではページ番号は記されていないが，PDFファイルのp.4の4.1.1.1節～4.1.1.11節からの引用。
 10. [w]は日本語の「う」(非円唇口舌狭母音)の母音の音声表記である。
 11. 日本語の「愛[ai]」や「家[ie]」は連母音であり，二重母音ではない。英語は一つのまとまった母音の発音の途中で音価が変化する二重母音であるので，“I [ai]”は二重母音である。
 12. カイザー(1998)では「悪い」と“worry”[wʌri] (bad)が並列されているが，「悪い」がこのような音声転写をされたのではなく，本稿では日本語母語話者が使う口語体が直接音声転写の元になったという立場を取る。
 13. φは要素の脱落を表す。
 14. [k]は[k]の硬口蓋化音を表す。
 15. ()内の[*]は語彙が文や句の中で使われており，全体での意味は英語で与えられているが，個別の意味が記載されていないことを示す。
 16. 英語の意味：The great depreciation of the value of the paper currency of the Imperial Japanese Government renders it impossible during the prolonged absence of my partners to accept your tempting offer.

17. 日本語の[o] (または，[ɔ])は英語の[o]と比較すると，水平方向でわずかに前よりとなるが，その差は大きくないので，垂直方向の移動のみ言及した。

参考文献 (和文)

1. カイザー・シュテファン(1998)「Yokohama Dialect—日本語ベースのピジン—」『国語研究論集』汲古書院，pp.83-107
2. 木村哲也(1997)「10万人留学生政策」と日本語教育—民間の日本語教育機関と日本語教師との関連を中心に—，『留学生教育』第1号，pp.85-101，留学生教育学会
3. 小玉敏子(1999)「Exercises in the Yokohama Dialect再考」『英学史研究』32，pp.1-11
4. 杉本豊久(2010)「明治維新の日英言語接触—横浜の英語系ピジン日本語(1)—」，『成城イングリッシュモノグラフ』第42号，成城大学大学院文学研究科，pp.357-381
5. 藤田俊一(1981)「所謂ピジアンイングリッシュと横浜用語」『英学史研究』第14号，pp.53-62
6. Stefan Kaiser(2010)「横浜ピジンのデータベース化とデータベースを用いた簡略日本語表現の研究」，つくばリポジトリ，https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=21443&item_no=1&page_id=13&block_id=83 (2017年3月27日閲覧)

参考文献 (欧文)

1. Atkinson, Hoffman (1879) *Revised and Enlarged Edition of Exercises in the Yokohama Dialect*. Yokohama. (reprinted in 2015 by Scholar's Choice)
2. Avram, Andrei A. (2014) Yokohama Pidgin Japanese Revisited. *Acta Linguistica Asiatica* Vol 4, No 2, pp.67-84